

第3章

育児で深める絆

育休を取ったことで、共有できた妻の気持ち。子育てをすることは、家族の絆が深まるとともに、職場や地域の人とのつながりを強めることにも

- 新しい家族を迎えるときに、夫婦で将来についてじっくりと話し合うことができた
- 妻の気持ちが理解でき、妻にも一人で過ごす時間が必要であること、妻の話聞くことが大切だと認識。また、妻にも好きな仕事をして欲しいと思うように
- 夫婦で協力して育児をすることで、お互いに余裕が生まれた
さらに、時間と心に余裕ができたことで子どもを誉めることが多くなり、子ども同士も誉めあうように
- 子どもがパパっ子に
- 「ママ友」や「パパ友」ができたり、地域や子どもの友達とのつながりができた。また、子どもの話の中の登場人物がわかるようになった
- 職場とのつながりを再認識できた

先輩育休パパから



3-01 妻、両親、職場の協力と、みんなへの感謝の気持ち。これが「格好良いパパ」の秘訣

「格好良いパパ」になって

荒井 清生 さん

息子は、朝目覚めるとまず私を呼ぶ。もちろん「ママ」の場合もあるし、時には「たつきゅう（大好きな宅急便）」のこともある訳だが「パパ」率は8割を超えている。これだけ息子に慕われているのは、しばらくの間育児に専念した賜物である。今回、私が育休取得に至った経過、実際の育休生活、そして職場復帰後の状況を振り返ってみたいと思う。

まず挙げられるは妻の影響である。妻は結婚当初から「子どもが生まれたら夫婦で育休を取ろう。」と繰り返し言っていた。実際に息子が生まれると、「少しの間だけでも育児に専念してみたら？」と更に強く押してくる。そんな中、男性の育休取得者の話を聞く機会もあり、私も育休を前向きに考える様になったのである。

私は育休を具体的に考え始めてすぐに早い段階で上司に意向を伝えた。上司は理解を示してくれた上、職場へも素早く私の意向を周知してくれた。おかげで休業する場合の仕事分担、引継ぎの課題等同僚と一緒に検討することが出来た。勤務先の制度が改正され、育

休代替に週30時間勤務の嘱託員から週40時間勤務の職員が雇用されるようになったことも弾みになった。

さて、もっとも説得が難しかったのが隣家に住む私の両親である。気持ちよく休む為にも外せないポイントであった。案の定、父からは「この不景気に男が仕事を休もうなんておかしい。」と反対され、母からは「我が子どもの面倒をみるから」と申し出があった。話を重ね、今しか出来ない贅沢として私の育休に理解を示してもらった時には実に晴れ晴れしい気持ちになることが出来た。

こうして、息子が1歳半になった頃の平成20年4月1日から半年間の育休が始まった。同時に職場復帰する妻から「いいとこ取り」と言われてのスタートである。息子はちょうど卒乳し離乳食も完了。やっと歩けるようになっていて、外はいい季節だったのである。さて、息子と2人きりの生活になると小さな命を預かる責任を今まで以上に感じるようになる。妻へ息子の体重減少を相談しても「うちんちいっぱい出た後でしょ。」と妙にあっさ

りしている。私が細かいことを気にし過ぎているのか？「オクラしか食べない日があってもいい。昼寝をしない日があってもいい。うちが今日出なければ明日出る。」と割り切れる様になったのは育休も後半に入った頃である。

食事を作って一緒に食べる。買い物や図書館に出かけ家では絵本を読む。昼寝をさせる。特別なことをしなくても幸せに満ちた時間であった。自分の幼かった頃を思い両親に対する感謝の気持ちも沸き起こった。朝からぐずりっぱなしでメチャメチャになる日もあったが、息子の成長と妻からの育児に対する労いと感謝の言葉を励みにする毎日であった。

さて、現在職場復帰し、半月程勤務したところである。復帰にあたり直前には大きな不安があったが、特別扱いされることなく初日から職場に迎えられた。同じ勤務先に勤める妻から職場の情報を聞いていたことも大きかったと思うが、半年間のブランクがあつて

も何とか対応出来ることは仕事を続ける上で新たな自信となっている。

復帰初日、久しぶりのスーツに着替え「今日からパパも仕事だよ。」と宣言した時には大いに息子に泣かれてしまったが、これだけパパ好きになったという育休の成果だろう。育休生活は終わったが、息子との絆や妻と深めた信頼関係は終ることなく私の大きな財産となるはずである。

最後に、私の育休の話になると「素敵なご主人。」「格好良いパパですね。」と妻は周囲から羨ましがられたらしい。まだ少ない男性の育児休業を後押ししてくれた妻と理解を示してくれた職場や両親、素晴らしい生活を与えてくれた息子に改めて感謝したい。そしてやはり「格好良いパパ」がもっと増えて欲しいし、男女を問わず育児に専念する者がもっと評価される社会になって欲しいと切に願っている。



執筆者の横顔：

公務員 1,000人～4,999人 30代前半
30代前半 本人・妻・子(1人)
平成20年4月～9月(6ヵ月間)



3-02 仕事は言い訳にできない。妻の時間を大切に思い、子どもとたくさん会話する日々への転換

家族

岩間 昌生 さん

私達には今現在、6歳と3歳の二人の娘がいます。私が育児休業を取ったのは下の娘のときです。

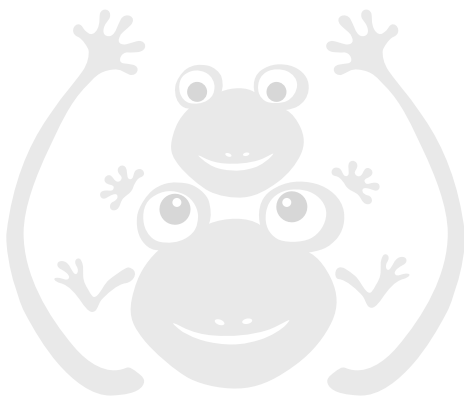
上の娘の時は妻の実家である名古屋の助産所で出産しました。

2人目が出来たと知った時、妻は私に「今度は自宅出産が良いね。そしたら立ち会えるし。」と言ってくれました。一人目の時に立ち会えなかったなので、私も大賛成しました。

自宅出産となると、身の廻りの事はもちろ

ん上の娘の事や家事全般をする訳ですから、この時点で育児休業取得を決めました。むしろ妻の方が「大丈夫なん！！」「そんなん取れるん！！」と心配していました。

上司に育児休業の件を話すと、「前例がないあからなあ～！！」と言われましたが、積極的に取る様勧められました。総務の人も役場等に聞いて調べてくれました。職場の同僚からも反対したり愚痴を言う人はいませんでした。私達が育児休業を取る上で一番問題





だったのが休業中の給付金でした。現在は、男女共に5割ですが、私の時は4割だった様に思います。当初私は3ヵ月間取る予定だったのですが、この収入の問題で結局1ヵ月間しか取れませんでした。

育児休業中は、洗濯や掃除、食事の用意とやる事は山積みです。その中で子供の面倒も見る訳ですから大忙しでした。一日中子供と居ると、楽しい事もありますが、イライラする事の方が多かった様に思います。

私は仕事を言い訳に育児から逃げていたのだと反省する事が出来ました。妻には一人で過ごす時間を大切にしてあげたいと考えられるようになったのも、この経験があったからだと思います。仕事復帰後は、早く帰宅し、子供と出来るだけ会話をし、妻の手伝いも心掛けています。

執筆者の横顔：

動物園飼育係 30代後半 30代前半
(1ヵ月間)



3-03 産後の妻をいたわり、育児に専念。子どもが話し始めた今、もう一度取得したい

育児休業を取得して

小田口 浩太郎 さん

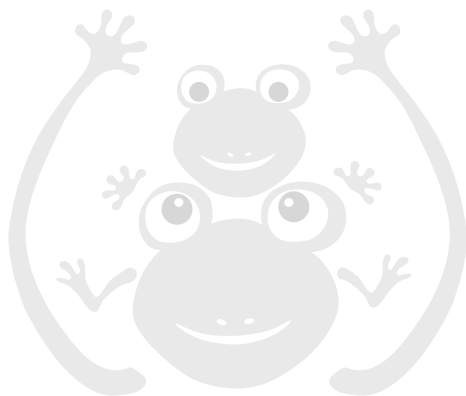
「こういう機会でもないと休めないでしょう」、育児休業を取得したきっかけはこんな妻の言葉だった。育児休業として丸まる1ヵ月会社を休んだ。入社して10年、無論経験したことはなかった。

出産の数ヵ月前から職場には「育児休業を取りたい」と話していたが予想以上に周囲は協力的だった。会社の就業規則では女性本人が育児休業を取る事に制限はなかったが、男性の場合は「妻一人での育児が不可能な場合に限る」とあって実際に取得する者はこれまでにいなかったようだ。なので年次休暇を取得

しそれに当ててる者がほとんどのようだった。

私の場合、妻に「多発性硬化症」という病気があって産後は症状が著しく悪くなる事が予想され、出産後すぐに再発予防の治療を行う事を予定していた為、会社にその旨を説明しようやく育児休業を取得できる手筈になった。

病院と会社が近い事もあり幸い出産にも立ち会えた。10数時間に渡る陣痛を経てようやく我が子に会えた。性別を知らされていなかったが望んでいた男の子だった。健康であればどちらでも良かったのだが、嬉しさがこ





み上げた。

実際子供が生まれてからは入院中の妻と子供を見舞い、沐浴の指導を受けるなど毎日慌しく過ぎていった。点滴治療を受けた為母乳育児が不可能となった妻の代わりにミルクをあげたり、退院後はオムツ替えも頻繁に行った。産後これだけ目まぐるしく生活が変わるのなら健康な母体でも疲弊するに違いない。ましてや出産という大仕事を終えた後ならなおさらの事だ。もし普段通りに会社で仕事をしていたらそんな事には気付かなかっただろう。

とにかくあつという間の1ヵ月だった。「1ヵ月経って育児が落ち着いた？」かというと決してそうではないが、産後の母体安定には、多少の助力となったであろう。それに家族の為だけに時間を費やすという貴重な時間を過ごせた。

現在息子は2歳半になるが少しずつ言葉を話し始め、こちらの言う事も理解しているようだ。息子とのコミュニケーションが楽しくて仕方なく、今もう一度1ヵ月休む事ができたら、と思うがそれは贅沢な願望だろうか。



執筆者の横顔：

会社員 1,000人～4,999人 30代前半
30代前半 本人・妻・子1人
平成18年4月～5月(1ヵ月間)



3-04 収入減よりまず取得。仕事よりも大変な育児・家事。妻の偉大さ、家族の健康の大切さを再認識

子育ては大変

匿名

私は、娘が生後6カ月から8カ月の間、育児を取得しました。出産後3カ月あたりから、妻の体調が芳しくなり、主治医から静養を勧められたのがきっかけです。

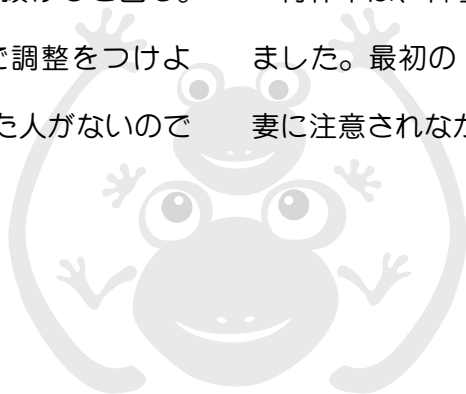
妻は専業主婦だったので、まさか自分が育児を使うとは全く想像していませんでした。自分とは無縁と思っていたので制度自体よくわからず、進行中のプロジェクトは？ 復帰後のポジションは？ 人事評価は？ 生活費は？ と不安が募るばかりでした。周囲に相談しようにも、会社全体でも経験者が数人しかいない状況だったので、「さあどうしよう」という感じでした。

思い切って上司に相談したところ、「正直言って、今プロジェクトから抜けると困る。ただ止むを得ない事情なので調整をつけよう。手続きは、部下に取得した人がないので

よく判らないが、人事部と相談しながら決めていこう！」とってくれました。

次に、仕事を休むので金銭面の問題が立ち塞がりました。初め、会社で推進しているのでてつきり補助がでると安易に思っていました。ところが、蓋をあけてみると失業保険からの補助、しかも支給は半年後……。しかし、幸いなことに、両親の家を借り住んでいたのので家賃がかからない。それなら数カ月はなんとか休めと思い、とにかく、育児をとらなければいけない状況でしたので、「どうにかなる！」と腹をくくり、取得を決意しました。結局、上司と相談してから1カ月後に私の育児生活が始まりました。

育児中は、料理以外の家事と育児を担当しました。最初の1週間は、要領がわからず、妻に注意されながらなんとか乗り切ったとい





う感じでした。一番つらかったのは夜にミルクを上げるのに2時間毎に起きることでした。睡眠が細切れになり、寝不足で疲れがたまると、昼は掃除、洗濯、買い物、娘の食事、お風呂、オムツ替えなどなど。さらに追い打ちをかけるように、離乳食を始めた娘がご飯を食べてくれないなど難題が次々出てくる。仕事をしているほうが、どんなにラクかと思い、改めて、体調を崩しながらも育児をしてきた妻の偉大さを知りました。

また、育休で父親が休むということは世間では珍しいようで、娘が発熱して病院に連れて行ったときは、すごく親切にしてもらいました。また、事情を知らないご近所の人たちが『もしかしかしてリストラされたの?』とウワサしているのを小耳に挟んだりもしまし

た。

育休を取得してから3年経ちますが、この経験が家族に対する意識を変えました。

家事や育児がどれだけ大変か身をもって分かったので、復帰後もできるだけ手伝うようにしています。また、家族の健康の良し悪しが生活のすべてに作用すると感じ、家族を大切にすることが強くなりました。成り行き上で取得したのですが、本当に良い経験をしたと強く感じています。

最後に、私の場合、金銭面、職場の理解等の環境が整っていたので助かりましたが、そうでないケースのほうが多いと思われます。現に、周りでは私しか取得者がいません。今後、育休取得の推進をする上で、更なる改善が必要と思います。

執筆者の横顔：

会社員 5,000人～ 40代前半
平成17年7月(1ヵ月間)



3-05 難しい出産、支えられるのは自分だけ。妻とじっくり話し、共有した未来像。家族はやっぱり宝物

家族は宝物

川島 光博 さん

今年の6月それはいきなりやってきた。
お腹の赤ちゃんに脳室拡大の疑いがあります、と。

2年前長女が五体満足で誕生していたこともあり我々夫婦への衝撃は、はかりしれないものだった。

その後の検査で、水頭症と二分脊椎の合併症が確認され、誕生後の障がいについても説明がされた。

出産は、帝王切開でさらにすぐの複数の手術が必要であり、対応できる病院がなかなかみつからなかった。

しかし、妻の実家のある高知県で対応してくれる病院が見つかり、里帰り出産を選択した。

この時、私は出産時から出産後の妻のケアができるのは旦那である私だけだと思い一緒に高知に帰り育児休業を取得することを決意した。

幸い、私は子育て支援サービスを提供する会社に勤めているため、社長もすぐに理解を示してくれた。とはいっても立ち上げてまだ2年目のベンチャー企業であり私も事業本部長という立場であるので一時的であっても抜け

ることは、会社に対し迷惑をかけるという気持ちが強くあったが社長はじめ会社の理解があり出産予定日前に引き継ぎを完了させ、継続して確認が必要なものは、ノートパソコンや携帯メールに質問連絡をしてもらうことで対応することとした。

通常分娩と違うため、ドクターからの複雑な説明も多く、妻は精神的に不安定になっていた。なので、育児休業の話をしたときはとても喜んでくれた。一方で今後の職に問題がでないのか妻として不安があったようだが、幾度も今後のことを妻と話をすることで不安も払拭できた。何よりも今回の育児休業がきっかけで妻と多くの話をする機会が増えたことは間違いない。

8月26日無事長男は誕生した。障がいがあることがわかった日に名前は決めていた。どんなことがあってもいつでも一緒にがんばっていこう、一心同体だよという気持ちを込めて一心（いっしん）と名付けた。

一心は予定通り出生後すぐに手術室に運ばれ、（私も同時に呼ばれ一心の体の状態を確かめ同意書を記入し）水頭症のシャント術と

二分脊椎の手術が開始された。
 出生後わずか数時間の一心が約半日に及ぶ大手術に挑み、見事手術は大成功し我々はホッとした。その後、誕生したばかりの一心の入院手続きや術後の経過説明など動けない妻に変わりすべて私に対応した。

その後、一心の術後の経過がよく予定より半月も早く退院を迎えられた。退院後は、妻の両親・4兄弟が協力をしてくれるということで、一時東京へ戻り、今は育児休業を終了し検診などにあわせて公休日を調整し必要時期に高知に戻るようになっている。

今回育児休業を取得し感じたことは、とにかく出産は妻への負担が多いこと。確かに、普通分娩でなかったからかもしれないが、上の子が生まれる時も出産の大変さは、わかっていた。

休業中には、妻とたくさん話をする機会もあり今後の子育てについても互いに意見をゆつくりじっくりと話し合うことができた。出産の時こそこれからの未来像を互いに話し合い

意思の疎通を図るべきであり、それが、夫婦円満にもつながると感じた。

今の日本にはまだまだ育児休業の取得が復帰後の出世に響くとか取得することは悪いことだという雰囲気があるのが現状だと思う。現に、育児休業を取得すると友人に話をした時、口をそろえていい会社だね。とみんなが言う。

こういう声がある以上日本は、出生率も下がり離婚数も増え続けると思う。これからの日本を支える若い命と力を担保していくには、もっと育児休業取得が義務づけられるほどの変化が日本には必要なのではないか。

職場に復帰後も公休の調整など会社側が全面的に理解・支援をしてくれている。これが当たり前になることを私は望む。

家族は宝物。育児休業を取得したことで、さらに強く感じた。気づきの多い期間であった。

執筆者の横顔：

サービス業・事業本部長 0～99人 30代前半
 本人・妻・子2人(男児1人(0歳)、女児1人(2歳))
 平成20年8月～9月(2週間)
 勤務先の制度として、毎月の検診にあわせて連休取得が可能





3-06 “共働かない夫婦”で絆が強固に。復帰後も、生産性の高い仕事を意識し、充実した日々を継続

勇気を持って一歩を

桐野 吉弘 さん

結婚して10年。8年前の長女の出産に始まり、以後長男、次女、次男と4人の子宝に恵まれた。妻は最初の出産を機に働いていた会社を退職、以後ずっと子育てに専念。ただ一昨年の次男誕生以降、転勤先の周りに頼れる親族もない状況下で、妻の心身の疲労度はピークに達していた。表立って不満は漏らさないものの、疲れた表情や子どもたちと感情的に衝突する場面をよく見かけるようになっていた。当時の私はといえば、毎日残業ばかりで平日はほとんど育児家事に協力できない状態。このままでは子どもたちにとっても、私たち夫婦にとってもいいことはない。思い切って育休し、私自身が育児家事に積極的に関わることで、妻の負担を軽減し、子どもの成長にとっても大事なこの時期を家族全員で穏やかに過ごしていきたいと考えた。

妻が一番心配したのは、私が仕事をしないで暮らしていけるのかという点。共働き夫婦が多い今の世の中で、いくら幼い子どもを4人抱えているからといって、“共働かない夫婦”になることには多少抵抗があったようだ。

時短勤務という方法も選択肢に上ったが、結局時間内では終わらず今までと同じようになることは目に見えている。可能な範囲で完全に休む以外に、私が描く暮らしを手に入れることはできないと決意を固めた。

上司に伝えたのは取得希望時期の1カ月前。5カ月半の育休を申請した。社内での男性育休取得者は私で3人目だが、これまでの2人は本社の内勤者で、営業所勤務の社員としては私が初めて。育休については理解を示してくれたが、後日後任の配属がすぐには無理なので、取得時期を少しでも後ろ倒ししてもらえないかという打診があった。私が休むことで当然同僚たちにしわ寄せがいき、今までお付き合いしてきたお客さんたちにも迷惑をかけることは間違いない。そう考えると、時期をずらすことも必要かと思っただ、結果的には我が儘を通させてもらうことにした。同僚のうち数人が応援してくれていたからこそ一歩が踏み出せたのだと思う。

こうしてスタートした育休。この5カ月半は私たち家族にとって夫婦、親子、兄弟姉

妹の絆をこれまで以上に深める貴重な機会になったように思う。妻と協力し合って育児家事をすることで時間と気持ちの余裕が生まれ、子どもたちに対して叱るよりも誉めることが多くなった。そして親のそうした変化は子どもたちにも伝染。子ども同士もお互いを誉めることが増えてきた。

そして、この育休取得の経験はその後の子どもたちとの関係や復帰後の仕事への取り組み方にも大きな影響を与えた。子どもたちとの関係でいえば、とにかく私が仕事から帰ると我先にとばかり4人の子が今日会ったことを報告してくれるようになった。聞き分けるのが大変ではあるが、とても幸せな瞬間だ。一方、仕事のことでは、復帰と同時に転勤となり、妻の実家のある神奈川県に転勤、在住することに。これまでと同じ営業所勤務ではあるものの親族のサポートが得やすい状況にしてもらえた。また、私自身の中でもこ

れまで以上に最小時間で最大効果を上げるための仕事のしかたを意識するようになった。その結果、平日でも週2、3日は育休中と同様、子どもたちと一緒に風呂に入り、寝る前に読み聞かせをし、寝かしつけることができている。また、これまた育休中から続けている朝食作りも、復帰後半年を経た今でも続けている。

こうした経験から、今後男性の育休取得者が増えていくことは、単に女性に過度な負担を強いる現在の子育て事情を改善していくという側面だけでなく、生産性の高い仕事を目指す社員が増えるという意味で企業にとっても大きなメリットがあることのように感じる。各企業が制度面、環境面で男性が育休を取得しやすいよう変えていく必要があるのはもちろんだが、父親たちも勇気を持って一歩踏み出してみれば世界が変わることを体感してほしい。



執筆者の横顔：

会社員 1,000人～4,999人 40代前半
30代後半 本人・妻・子4人(男児2人、女児2人)
平成19年10月～20年3月(6ヵ月間)



3-07 子育ての多幸感、専業主婦の気持ち、周囲の反応と理解、そして協力。いろいろ感じた育休体験

赤ちゃんとの初めての生活

黒川 滋 さん

私たち夫婦には急にやってきた妊娠だったので、何もかも準備なしで出産に向かっていきました。気後れして育児休業の手続も後手後手にまわり、ドタバタと出産、産後の休暇、育児休業取得でした。当時の上司とそのまた上司が両方とも女性だったので、育児休業は、上司たちの問題意識に沿って設定されたような感じです。過去、男性の先輩に取得した人が1人いたことも幸いでした。上司たちは1年取れ、と言ってくれましたが、保育園の入園の関係から妻の産休明けから4月までの3カ月にしました。

私自身は小さな頃から、男だから、女だからということが嫌いで、育児休業は取りたいと思ってきました。育児休業を取れる環境を実に運のよいことだと受け止めました。

育児休業制度が実質的に保障されない非正規労働者である妻にとって、夫である私の育児休業取得は仕事を続けていくために切実なものでした。正社員と非正規労働者との格差を痛感させられました。

私の育児休業に最も抵抗したのは私の父です。猛烈サラリーマンとして働き、部下を容赦なく怒鳴ってきた父には、男が子育てで仕事を休むことは理解不能で、社会の掟破りに見えたようです。

出産間際の妊婦に負荷や、医師や助産師が替わるストレスなどを考え、妻は里帰り出産はせず実家の応援なしに住んでいる街で産むことを決断しました。上の子の出産のときには、陣痛だけが弱く、力が足りなくて、1時間半は私がおなかに乗って押し続けました。上の子が最初に見た人間は私です。下の子は瓜を割るように元気良く生まれてきました。

上司の計らいで、育児休業の前に、産後も使わなかった夏休みと組み合わせて2週間程度、休暇を取りました。育児休業よりも、出産直後のこの長めの休みが大切なことになりました。

助産師から、産後の母体保護のために1週間は何もさせるな、2週間は歩かせるな、3週間は家事をさせるな、と命じられました。出産直後は、大量のおむつの洗濯と、助産師が指示する手の込んだ食事づくりに追われました。妻の父母は九州にいるので頼りません。私の力で家事を乗り越えなくてはなりません。さすがに音を上げて、2カ月ぐらいから紙おむつに変えました。

それでも生まれた直後、助産院の日なたで赤ん坊の甘い匂いを嗅ぎながら昼寝する日々は、何よりの多幸感を得ました。力強くも弱々しい命を手を抱え、20年後の社会はどうなっ

ているのか、などと考えさせられました。赤ん坊を抱えて終戦直後の中国大陸をさまよった私の祖父母の苦労なども具体的に想像できました。

産後数週間の母体保護が必要な時期を夫婦2人で乗り越えられるように、この期間に仕事を忘れて生まれたばかりの子どもと向き合う時間があれば、もっと多くの家庭にふくらのある育児をもたらすことになると思います。

その後に始まった育児休業期間は、何にもできない赤ん坊に、2時間ごとにミルクを20分かけて与え、30分ごとにおむつを替えて、それを24時間続けて、3ヵ月続けて終わりました。内心、育児休業で本をたくさん読み、あるいはデイトレードして一儲けしようなどと邪なことを考えていましたが、全くできませんでした。近所のスーパーに必要な最

小限の買い物に行くのが限界。家に縛り付けられない生活をしてきたので、育児休業を経験して家や地域からなかなか離れられない専業主婦の気持ちがわかりました。

育児をすることが仕事の能力の向上に結びつくかのような議論があります。私にはどうだかはわかりません。私は同僚に子育てのため仕事で迷惑をかけていますが、同僚たちは暖かい眼差しで見守ってサポートしてくれます。それは育児休業を取るため、私の置かれた家庭の状態を認識する機会があったからだと思います。そして同僚たちは私のフォローをして人間のキャパシティーを広げています。しかし私自身は、仕事と家庭との綱渡りで、仕事や人間的な能力向上どころではなく、日々、子どもに金切り声をあげる回数が増えているのが悩みです。



執筆者の横顔：

団体職員(非営利団体含む) 0~99人

30代後半 本人・妻・子2人

平成17年1月~3月、18年11月~12月(5ヵ月間)



3-08 仕事中心主義だった自分。育休取得で、家族の未来に劇的な変化が。父親も、育てられるのだ

育休は「通過儀礼」!?

佐藤 新太郎 さん

「男らしく」育休を取得してほしい。「どこから乳がでるんか!?!」と言われるかもしれないが、それは大丈夫。男は出産と授乳以外ならなんでもできる。強い男は弱っている人を助けるべき。ならば、苦悩する母親らに寄り添いたい。私が教職を休む前、家庭訪問で「先生、お子さんは?」と保護者によく聞かれた。その真意は「あなたに子を持つ親の気持ちはわかりますか?」ということだったに違いない。

育休取得前の私は、一言でいうと「仕事中心主義」。「子は親の背中を見て育つ」とよくいうが、家中に私の背中はなかった。「俺、手伝うよ」というアシスタント的感覚で、家事・育児もそれなり。そんな父親だった。やがて第二子が生まれ、妻の育休も3年を経過しようとするある日のこと、「共働きを続けるつもりなら、育休を取って。」と妻は譲らなかった。かくして私は育児休業を取得して「あげる」ことにした。

「あなたは仕事だけに専念しなさい。あとは俺にまかせとけ!」とまず妻に宣言。実は「ヤマトナデシコ」とはどういうものか手本をみせたかったのだ。

すべてを私が背負うはめになってしまった……。調味料はどこだ? なべは焦げ付く、

さっき片づけたばかりなのに……。その間も1歳の娘は足元で叫び続ける。「ママ~!!」。「なんでこんなに手をわずらわせるのか。少しくらい自由な時間が欲しい。トイレぐらい一人でいきたい……。苦労して食事を作っても、「外で食べてきた」はないだろう。なにも知らない人から「育休は楽やろ? 休みでいいな。」と言われるたびに腹が立つ。

いらだちが子どもへ向かう。「いい加減にしなさい!!」と、子どもについ感情的に当たってしまう。ハッ、と我に振り返る。毎日この繰り返しでストレスがたまる。子どもの発育も私だけの責任として思い詰めてしまう。「子は親の鏡」とはよく言ったもので、すべて子どもはまねをする。長女が次女を叱る決め台詞の「もう、知らんっ!」は私の言葉。「お父さん、きれいな人がいるねー」とは、4歳児の言葉とは思えない。扇風機のスイッチを足の指先で消している。家に帰れば「あー疲れた、疲れた」を連発。おちおち不用意な言動はできない。それらにはすべてモデルがあるわけで、仕事に疲れ切った背中ばかりを子どもに見せることは、必ずしもよいことではない。ネオンの影に泣く母と子の姿が脳裏をよぎる。子どもは大人が作った社会でしか生きることができない。

仕事を休んでまで、私は何をしているのだろうか？ 心中に葛藤が生じた。満員電車で仕事へ向かう途中、見知らぬ無人駅にぽつんと1人降ろされてしまったようなさみしい気持ち。昨今の「育児ストレス」による痛ましい事件。それもわかってしまう。もう限界だった。

私は爆発。俺にも人権はある！ しかし、妻は「あなたの仕事でしょ！」と引かない。当然だ。今まで妻が「孤独な戦い」を強いられていたからだ。私は反省した。

この苦労を共有できたことは大きい。これ以来、私の「ヤマトナデシコ」育成計画は終息。妻をはじめ女性に対しては羨望の眼差しを注ぐようになった。長い道のりではあったが、夫婦の絆はさらに強まった気がする。

さらに人間としての幅も広がる。心強い味方、「ママ友」も自然と増えた。祖父母とのつながりも再確認できた。家事・育児の手ほ

どきを受け、生活力は向上した。育児もみんなでやるものだ。私は一人ではない。

「命の育み」の実践は私を育てた。「お父さんがいい！」とくっついて来る子どもたちから父親にしてもらったようなものだ。目の前の子どもたちには私しかいない、という環境が私を「親」に変えた。すべては私しだい。それは負担であるが、喜びでもあることに気づいた。「父親」も「父親」をすることで「父親」になっていく。長い人生、こんな時間が男性にもあっていい。

そして現在。「通過儀礼」を受けた私は、以前とは違う。そんな私を見て、妻は信頼を深めてくれた。そして3人目を決意。男の子が生まれた。わずか1年11ヵ月の男の育休。私と私の家族の未来を、実に劇的に変えてくれた。みんな、ありがとう。



執筆者の横顔：

公務員(教員) 0~99人 30代前半
20代後半 本人・妻・子3人
平成17年4月~19年2月(1年11ヵ月間)



3-09 困難な状況のなか、自身の強い意志で育休を取得。周囲の変化と、新しい社会観への期待

摩擦は仕方がない

佐藤 崇 さん

取らないと一生後悔するだろう、と思った。生後間もない二人目の娘の成長を見ながら、短期間でもよいから、育児休業を取って、ゆったりと過ごしたいと考えた。

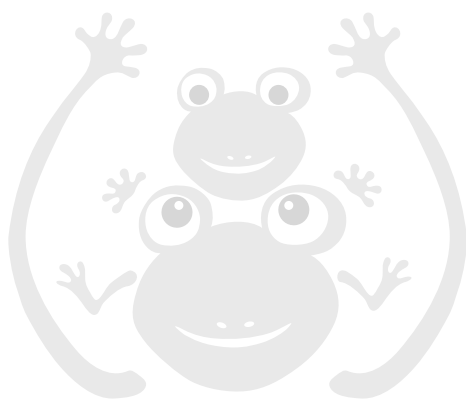
妻は三交替勤務の看護師の核家族である。保育所への送迎も私の方が多かった。職場では、いくら仕事を計画的に早く終えても、上司からは、「どうして、毎日そんなに早く帰らなくちゃいけないの。」と言われることがあった。

とても職場に相談できるようには思われ

ず、私は、山形労働局の雇用均等室を訪ねた。育児・介護休業指導員の方から、「お父さんが、そのように思うなら、取得してください、会社とうまくいかないときにはバックアップしますので。」とのアドバイスをいただいた。

会社への申請後、申請を取り下げてくれなしかと言われたが、私は、行政のバックアップをもらって、この決断をした旨を申し上げ申請を受理していただいた。

たしか、歴史家の阿部謹也氏が、日本には世間があつて社会がない、と述べている。私





の両親、そして妻さえも、「そんなことをして大丈夫なの?」という反応だった。私は、腹をくくっているし、法律で保障されているからいいと言った。応援は外部のマスコミだった。育休中の生活を書いた投書がきっかけで、社説を書くための取材に東京から新聞社の方が自宅に来てくれた。それは、平成18年9月3日の社説「男の育休 1週間でもいいから」だ。

育児休業を取得したことは、私にとって、ワーク・ライフ・バランスの取れた生活を送

るのだ、という周囲への宣言だった。子どもの世話に待たはきかない。仕事は計画的に効率よく終えねばならない。そして、家事・育児モードへのチェンジである。このことによって娘たちとたくさん過ごせるのがうれしい。そのためか、妻が夜勤でもさみしがることはほとんどない。

男性は、育児休業を取得して赤ちゃんのウンチで手を汚すことで新しい社会観を得るに違いない。



執筆者の横顔：

ISO9001,14001管理業務 40代前半
40代前半 本人・妻・子2人
平成18年7月～8月(2ヵ月間)



3-10 2回の育休から感じた、社会とのつながりの必要性、思いやりのある共同生活に向けた関係性の変化

家族のステキな未来のために～期間限定専業主夫のすすめ～

竹村 直人 さん

現在2回目の育休中です。第1子のときは生後4か月から7か月間。今回は生後6か月から約1年。いずれも完全母乳の子を離乳前から長期で、というパターンです。

育休取得によって得られたものはたくさんあります。自分の子どものさまざまな成長を事細かに目の前で体感できること。お座りなど、何かができたという成長だけでなく、絵本を読んだときの反応の変化など、日々の小さな成長も体感できます。子どもの笑顔を見ていると、子育てという経験ができる幸せを感じます。また、子育て経験が支えるいい意味での自信と自覚、そして子どもとの間に築かれた相互の信頼関係。上の子が1度目の反抗期を迎えた今、改めて実感しています。加えて、共働きの間、何かと家事労働の負担が高まりがちであった妻と、今後も「思いやり」のある共同生活を続けていく上で、私自身が専業主夫として、家事・育児を含めた家庭生活をトータルに見渡す機会を得られたことは大きなメリットです。さらには、子育ての苦労を真に実感することによって、自分の両親

との関わりにもなにがしかの変化があったように思います。

もちろん、育休中は、慣れない子育てに加え、今までは「適当に」分担していた家事にも大きな責任（と妻からの期待）がのしかかり、肉体的にも精神的にもたいへんな側面があります。その意味では子育て専業主婦の苦労を実感できます。たとえば離乳食。慣れるまでは、毎日の大人の食事だけでもたいへんなのに、離乳食までも感じてしまい、バタバタしていました。そんななか、育休生活の中で一番つらかったのは、仕事がなくなることで、外界とのコンタクトが切断されたことでした。時折入手する「ママ・サークル」の案内には足は向かず、買い物に行っても「授乳室」でミルクをあげることはできず（男子禁制）、おむつ交換台も女子トイレにしかないこともしばしば。なかなか「ママ（パパ）友」を作るきっかけもなく、ネットで「育児サイト」をのぞく程度。情報をかき集めて、がんばって家事に育児に励んでも、仕事のよ

く、社会から疎外され、自分自身がどこかに埋没していくような感覚に襲われたこともあります。もちろん、そんな夫を「評価」するのは妻の役目でしょうが、妻も夜間授乳をしながらの仕事復帰直後。肉体的にもたいへんで、なかなかそんな精神的余裕もないようです。その意味で、とくに子育て中の専業主婦・主夫が、社会とのつながりをもって、そのサポートを得ながら、心身ともに余裕をもって子育てに取り組むことができる体制づくりが必要だと感じました。このことは子どもの豊かな心を育ていく上でもプラスになると思います。

育休取得は、今後の自分の人生を考えたときに、夫婦の関係、子どもとの関係などにおいて、得るものが大きいというのが今の私の結論です。しかし、日本の職場の現状は、男性が育休を取得し、その後職場復帰するということについて、かなりの困難を抱えています。私の職場は、上司や同僚の理解が得られ、

比較的取得しやすい職場でしたから、2回も取得することができたのですが、その際「とれる条件のあるところからとっていく」という発想のもと、男性が取得するということが社会的にアピールするささやかな一事例になれば、という思いもありました。男女ともに社会のなかで生き生きと働き、生活できる社会の確立のためにはもっと男性の育休取得が必要だと感じています。

現在私は、妻の仕事の関係で、外国での育休生活を送っています。外国での生活は初めてですので、言葉や生活習慣などで戸惑うことも多いのですが、地域のベビーサークルで育休パパに出会うなど、日本とは異なる社会環境からくるよさも感じています。ともあれ、今回の育休も、家族のきずなが強まるいい機会ととらえ、前向きに今の生活を楽しんでいこうと思っています。



執筆者の横顔：

公立学校教員(教諭) 150人 30代後半
30代前半 本人・妻・子2人
(1年10ヵ月間)



3-11 父親か母親かではなく、どれだけ愛情を持った育児ができるかが、大切。愛情表現としての育休の必要性を感じた

育児休業は最大の愛情表現！

水流園 光児 さん

子どもにとっていちばん必要なもの、それは親からの愛情ではないでしょうか。子どものために今しかできないことをしてあげたい、そういう意味で、育児休業は最大の愛情表現だと思います。

我が家は共働きの私と妻、5歳、3歳、0歳の3人の男の子の5人家族です。近頃は共働きの家庭も増えており、夫が家事や育児に協力することは当たり前になりつつあると思います。私の職場では、子どもが3歳になるまで夫か妻のどちらでも育児休業を取得することができるため、まず妻が育児休業を取得し、その後、私が妻と交代するというパターンで、長男が1歳から1歳半までの半年間、次男が1歳2カ月から1歳半までの4カ月間、育児休業を取得しました。現在、妻が三男の育児休業中ですが、もちろん今回も、私も育児休業を取得する予定です。

育児休業は機会があれば取得してみたいと思っていましたが、実際に長男の育児休業を取得する際に悩んだことは、ちゃんと育児ができるかということや、職場が理解してくれるかといったことではありませんでした。私はもともと、男だからといって家事や育児ができないというのは言い訳にもならないと思っています（ただし母乳だけはどうにもなりま

せんが）。しかし、子どもにとって母親は特別な存在で、「まだ1歳くらいの頃は父親より母親を常に必要としているのではないかと、結果的に母親から離れてしまうことは子どもにとって本当に幸せなことなのか」という部分で非常に悩みました。そのとき妻に「父親か母親かよりも、どれだけ愛情を持った育児ができるかじゃない？」と言われたことが、育児休業を取得するきっかけとなりました。次男のときは「お兄ちゃんときは休んだのに、僕のときは休んでくれなかったの！」なんて成長してから言われたら困るので、迷わず育児休業を取得しました。

男性の育児休業といっても女性の育児休業と比べて特別なことはなく、その大変さも男女平等です。仕事と育児は単純に比較できるものではないし、個人差もありますが、どちらかと言われると私の場合は仕事の方が大変なように感じました。ただし、このように言うとうと誤解されるかもしれませんが、家事、育児がラクということではなく、なかなか言うことを聞いてくれない子どもたちと一日中過ごす、自分のペースで家事などを進めることが全くできないため、精神的にかなり疲れますし、イライラすることも多く、仕事とは違った大変さがあることを実感します。しか



し、そういったことも含めて、男性が育児休業を取ることは、家事や育児から学ぶことも多く、仕事では得られない貴重な体験です。また、会社に勤めて10年くらいにもなると、自分もそうでしたが、なんとなく仕事慣れしてきてしまうというか、惰性で仕事をするような部分が出てきてしまうところもありますが、そういった時期にリフレッシュする機会にもなり、また新たな気持ちで仕事に復帰できました。

さらに、妻にとっては「家事や育児の大変さを理解してほしい、自分も働きたい」という思いを叶えるものでもあるでしょうし、子どもにとっては、毎朝、妻の出勤で泣かれるたびに「やっぱり母親と一緒にいいのかな…」とガッカリすることもありましたが、それでも父親と毎日一緒に過ごすことで絆が深ま

り、大きくなって「お父さんと毎日一緒だった頃があったんだ～」なんて思ってくれると嬉しいし、そういう部分で父親を見る目も変わるのかもしれませんが。

これから育児をする男性には、ぜひ育児休業を取得してもらいたいです。これまで私が育児サークルなどに参加しても、周りにはお母さんたちしかいませんでしたが、そういった場に父親が増えてきて、父親同士で「最近子どもの夜泣きがひどくて…」「うちもちょっと前までそうでしたけど、そういうときはアレがいいですよ…」みたいな会話ができると、もっと心強いような気がします。そうこうしてる間に父親が育児休業を取得するのが当たり前になって、「〇〇さんって、父親が育児休業を取らなかった時代の人ですね」なんて言われる時代が来るかもしれませんね。



執筆者の横顔：

公務員 5,000人～ 30代前半 20代後半
 本人・妻・子3人 平成16年10月～17年3月、18年12月～19年3月(10ヵ月間)



3-12 育休取得時に感じるプレッシャーと思い違い。大切なのは、妻のストレスを和らげること

お父さんもいっしょ

匿名

育児休業をはじめたばかりの頃の一コマ。「男性も休暇を取れるなんていい職場ですね」「いや、どの職場でもとれるはずですよ」「そういうものですか?」「保険からの育児休業給付金はあるけど、会社からの給料はもちろん無給ですけどね」「給料でないんですか、そりゃそうですよね」。

おおむね世の男性の育児休業に対する認識なんてこんなものだろう。「男が育児休業」というとまだまだ珍獣扱いされる時代である。人気があるテレビの子供番組もタイトルは「お母さんと……」だ。おとんはどこ行った?と言わずにはいられなくなるくらい、子育て=女性の仕事という認識が世間ではまかり通っている(と思う)。

私のつとめる職場は女性も多く育児休業に対してはとても理解のある方だ。女性は子供を産むとほとんど育児休業を取り、後に復帰して働いている。もちろん男性である私が取ることに対してはあからさまな非難はない。ただ好奇の目にはさらされる(賞賛の眼差しを含め)。それだけならいいのだが、「奥さん

が仕事をやっているから取るんですか?」という言葉もかけられる。「いや二人で育児に専念する」というとお節介にも収入の心配までしてくれる。「休まなくても育児をサポートする方法はいくらでもあるよ」とアドバイスもくれる。とてもありがたいことだと思う。しかし、女性が育児休業を取るときこのように言われるだろうか?ただ純粋に祝福し「仕事は大丈夫だから子育てに専念してください」と言ってくれるのではないか?

実はこれが男性が育児休業できない一番の要因ではないかと思っているのだが、世の多くの男性には「育児はたかが家庭のことに過ぎない」という意識がどこかにあるのではないか?いくら制度としては整っていてもそこにいる人間の中に「育児は仕事より価値が低く、女性のやること」という意識があるかぎり男性の取得率は上がっていかないと思う。

実際に休みに入ると「育児」はそんな甘いものではないことを思い知らされる。我が家では基本的に妻が育児、私が家事全般という

分業体制なのだが、初めてづくしなので当然のことながらしばしばケンカが起きる。たとえば、妻が子供を寝かしつけるためにあの手この手でなだめすかす。私も手助けをしようと思い子供の相手をする。しかし妻にとっては私の行為がストレスになる。「せっかく寝かせつけたのにまた余計なことをして」という思いである。よかれと思ってやったこちらはたまったものではない。いきなり出鼻をくじかれ、お互いにストレスをためる結果となる。こういう状況が24時間続くのである。

休職してみてもわかったことだが、育児を一人でこなしているお母さんは24時間救急救命医のごとく子供の心配をしている。買い物に行っても授乳の心配、おむつの心配。よく泣く子供は時としてうっとうしい存在になる。もちろん家事もこなさなければならない。そして産後、体力を回復するには実は相当時間がかかる。乳腺炎などの病気にもかかる。相当なストレスがかかり、いつも戦闘モード。せめて夫にはあうんの呼吸で自分の状況を理

解し、行動してほしいと思っている。しかし私も含め世の男性のほとんどは、最初そのことがわからない(と思う)。妻が子育てする様子をつぶさに見て、失敗を重ねながら学習していくしかすべがないのだ。実際先ほど例に挙げたような状況が二、三度続くとさすがにどういうタイミングで手を出せばいいのかわかってくる。そういうことを一つ一つ繰り返し、最近ようやく子育ては妻のアシストをすればいいのだと思えるようになってきた。

もちろん育児休業などしなくとも仕事と両立させているお父さんはたくさんいる。しかし自分はそんなに器用な方ではない。休職していなければ、妻が発しているシグナルとは全く見当違いな方向に自分の思いこみで突っ走り、衝突し、挙げ句の果てには子育ての責任をすべて妻に負わせているかもしれない(きっとそうだ)。夫として、父親としてどういう振る舞いをすればいいのか？ 育児休業はそれを考えるまたとない機会となっている。

執筆者の横顔：

団体職員(非営利団体含む) 5,000人～
30代後半 30代後半 本人・妻・子1人
平成20年9月～21年3月(5ヵ月)





3-13 妻と、子どもと、大切な仲間を支えられた育児。親から子へと受け継がれる家族の絆

絆（きずな）

平林 陽 さん

「預けるなんて、もったいない！」——長男ススムが1歳を迎える平成19年4月から1年間の育児休業を決意した理由のすべてが、この想いだった。歩けるようになる、話せるようになる、歌えるようになる……。成長の瞬間を、保育園の先生から聞くのでなく、この目で見て、感じて、一緒に喜びたい。ススムが生まれて間もない時期から、僕は自然にそう考えるようになった。

「育児休業なんか取ったら、職場での立場が悪くなるんじゃないか……」小学校教諭の妻や、僕ら夫婦の両親は、このことを最も心配してくれた。しかし実家は両方とも遠隔地、夫婦で育児を担っていかねばいけない。どう育児しようか、仕事は、家事は……。まさに僕ら夫婦にとってのワーク・ライフ・バランスを本音で話し合う日々が半年続き、10月、ついに僕の心は決まった。

「課長、実は、来年4月から1年間、育児休業をいただきたいんです。」——なぜ育児休業を決意したか、職場への影響をどう考えたか……。すべて話し終わった後、返ってきた言葉はこうだった。「正直驚いた。でも、僕も共働きでやってきたから、わかる。もしいま君の年だったら、多分同じように育児休

業を取っていたと思う。応援するよ。」温かさに満ちた課長の言葉は、僕はもちろん、心配していた妻や両親の心をも一気に解きほぐしてくれたのだった。

この一大決心するにあたって、最後まで悩んだポイントが3つあった。

まず仕事面。1年間欠員を生じさせることは影響が大きいから、僕はなるべく早く決断し、申請することにしていて、「半年前に申請してくれたおかげで何かと助かった」とは、後に人事担当から聞いた話である。何よりも、多様な働きを認め、社会に広げていこう、という市長をトップに、上司や同僚の深い理解があったからこそ育児休業の取得が実現したと、心から感謝している。

次に、経済面。職場の育児休業制度では子が1歳を超えたら無給。1年間、妻の給与でやりくりする必要があった。しかし、子どもとの毎日は行動範囲も限られ、そもそもローコスト。加えて、無給であるが故に、職場に対する気兼ねもなく、精神的にも楽だった、というのが正直な感想だ。

最も不安だったのは、育児面。ママでなければどうしても乗り越えられない育児の局面が

たくさんあるのではないか、ということだ。しかしスタートしてみれば、これも杞憂だった。ちょうど僕の育児開始にあわせて卒乳が上手くいったこと、また、近所の「ママ友」たちが、僕に選手交代した後も変わらず仲間に加えてくれて、悩みを分かち合い、一緒にリフレッシュできたこと、そして仕事や趣味の仲間達が、時折、飲みを誘ってくれたこと。妻と、ススムと、大切な仲間が、僕の育児を支えてくれたのだ。

1年間にわたる“育児&専業主夫”の経験が僕にくれたものは数え切れない。成長が一番近くで感じて一緒に喜べたこと、たくさんの思い出とともに絆を深められたこと、家庭・育児・仕事に対する考え方の変化……。何より、育児の喜びも楽しさも苦労もイライラも、すべて同じ経験を夫婦で共有できたこと。そして、僕が育児に専念していることで、妻が安心して職場復帰し、仕事と向き合えたこと。これらすべて、育児休業がくれた priceless

な贈り物だ。

僕は「育児休業の取得こそが育児参加」とは限らない、それぞれの家族にそれぞれのワーク・ライフ・バランスがあると思う。大切なのは、家族の状況に応じた多様な働き方の選択肢が用意され、自由に選ぶことができ、その選択を社会が温かく受け入れることではないだろうか。

最終日、育児休業の日々を記したブログを僕はこうしめくくった。……仕事はチーム・プレー。代役は必要。でも、ススムの父は、妻のパートナーは世界で僕だけだ。理想論かもしれないけれど、明るい家庭がよい人間を育て、よい社会をつくるに違いない。だから、何より、家族と、そして自分自身が大事なんだ。「あなたの子でよかった」と僕が親に思うごとく、いつかススムが僕にそう思ってくれるように、そうして家族の絆がいつまでも続くように、心から願う。



執筆者の横顔：

公務員 1,000～4,999人 30代後半
30代前半 本人・妻・子1人(男児1人(2歳))
平成19年4月～20年3月(1年間)



3-14 育児・家事ともに夫婦でお互いのフォローができるように。子どもと向き合い、得るものの多い体験

育児休業を取得して感じたこと

松場 実千雄 さん

育児休業を取得しようとしたきっかけは妻が二人目の子供の育児休業を取得していたことからです。妻は一人目の子供のために1年半休み、二人目の子供のためにも2年くらい休む予定でした。そんな中で妻から僕に育児休業を取って見たらどうかという提案がありました。一人目の子供の時はほとんど任せっきりにしていたこともあり、二人目の子供の時は自分でも機会があれば育児に関わりたいという気持ちがありました。僕は自分の子供なのに自分が育てなくてどうするという気持ちもありましたし、後で育児休業を取っておけばよかったと後悔したくはなかったため、この機会に育児休業と取ろうと決意しました。

【育児休業を取得するに当たっての職場とのやり取り】

当初、育児休業を取得するなら、しっかり子供と向き合えるように1年以上の期間で考えていました。しかし、現実には男性が育

児休業を取得するという事はそう簡単なことではありませんでした。やはり一番問題になったのは、仕事の問題でした。

僕の所属するグループは、選挙事務を担当しており、休もうとしていた年に選挙が3つも控えていました。そのため、上司からは、応援してやりたいが1年以上の育児休業は選挙事務に支障があり、認めることは難しいと言われました。通常業務の範囲で育児休業を認められないのであれば納得できませんが、選挙事務のことで育児休業を認められないのは、その大変さを知っているだけに、あきらめざるを得ませんでした。やはり自分が休んだことで他の人に多大な迷惑がかかることはできないという思いがあったからです。結局、選挙事務を行う時期を避け、妻が職務復帰しやすい時期を考慮した結果、僕が取得した育児休業の期間は、2か月程度でした。

【育児休業中の日々感じたこと】

最初のうちは、慣れない育児と家事をする

ということで、仕事していた方が気が楽かなと思うときもありました。しかし、自分の子供の今しか見られないしぐさや表情を見るにつれて子供のことが、よりかわいく思え、だんだん育児が楽しいと思うようになりました。

また、家事については、ほとんど一任されていたため、炊事、洗濯、掃除はもとより、二人目の子供の幼稚園の入園準備、ついでに幼稚園に通っているお兄ちゃんの遠足の弁当作りまでやることになり、妻の大変さを身をもって知りました。

初めのうちはご飯を作っても「お父さんのご飯おいしくない。お母さんのご飯が一番おいしい。」って言われていましたが、育児休業も1か月ほど経った頃「お父さんのご飯おいしい。」って言うようになってきたときはとてもうれしかったです。

【育児休業を取得してみた】

男性の育児休業は、いろいろな障害があつて取得しにくいのが現状だと思います。経済的に難しい、職場に迷惑をかけるなど育児休業が取得しにくい理由は様々だと思いますが、僕自身、育児休業を取ってみて、男女の区別なく家事や育児においてお互いをフォローすることができるようになったり、子供とじっくり向き合うことができたり、育児休業を取得してよかったと思うことがたくさんありました。

家庭第一と言葉では言っても結果的に仕事第一になってしまう社会では、子育てはとてもしにくいものです。より多くの男性が育児休業を取得することで、育児に寛容な社会の醸成に一步一步近づいていけばいいなと思いました。



執筆者の横顔：

公務員 300～999人 30代前半
30代前半 本人・妻・子2人
平成20年4月～5月(2ヵ月間)



3-15 自身の強い思いで育休取得。子育てネットワークや友人の輪も広がり、家族の大切な財産

睡魔と闘う育児休業

匿名

今回の長女（平成20年4月生まれ）の育休で2回目の取得になります。7年前の長男（小学2年生）の育休を取得したときは、300人以上の職員が働く社会福祉法人の男性育休取得者第1号で、その後一人の方が取得したものの今回の自分で男性育休取得者は延べ3人の状況です。法人においては4月からワーク・ライフ・バランスや育休に関する制度が整備され、管理職の自分が積極的に取得することがワーク・ライフ・バランス推進につながると思いました。ちなみに長男の出産では半年以上の妻の入院生活を経験し、今回長女のときは自分が長男の面倒を見ながら4カ月間の妻の入院生活と途中で救急車による総合病院から日赤病院（総合周産期母子医療センター）への救急搬送、MFICU（母体胎児集中治療室）やNICU（新生児集中治療室）も経験したことから、出産や子育ては父母含めた家族全員の協力で行うものとの認識なので育休を取ることが当たり前という

感覚でした。

取得にあたって職場の理解はあるものの自分が抱えているかなりの仕事量を誰に分担するか、仮に担ってもらってもその人その人が仕事に対して飽和状態にならないかが心配でした。故に育休を取得することの理解はあるけれども、実際に自分の仕事を割り振るところでは調整が大変でした。

育休取得は妻の要望よりも自分が取りたい、子育てに集中したいということと、長男にも子育てに積極的にかかわる親父の後ろ姿を見せたいという思いが強くありました。実際の育休中はそれまでの仕事の疲れで、昼食後に娘と一緒に寝入ってしまい娘がぐずっていても起きられないことが度々あり、妻から「育休中なのに！」と怒られ、「だって眠いんだもん」と、か弱い声で返答していました。夜泣きの対応でも寝入っていて起きられずに怒られ、妻の体調の悪いときは夜の娘の対応を代わることもありましたが、逆に妻から「寝



入って娘の上に覆いかぶさっても気づかないのでは？」と心配がられました。妻からみると納得のいかないこともあったかと思いますが、自分から育休を取りたいと思って始めたことなので、その思いを実現できた充実感は大きくありました。客観的にみれば生後2カ月の期間を妻一人で長男も含め面倒をみるこの負担は非常に大きいので、寝入ってしまうと起きないダメ夫でも少しは精神的・肉体的支えになったと思っています。(妻の評価は違うかもしれませんが……) 長男は母の入院にも耐え、たくましくなり、今では妹の面倒を積極的に見てくれています。

復帰後は仕事が山積みで他の人に分担していた仕事を戻してもらって一つずつ取り組む毎日。こんなことなら休まず自分がやっていたほうが楽だったと思わなくもないですが、支えてもらった同じ職場の人たちに感謝しつつ集団の成長という観点からも成果はあったと思っています。保育園の行事や懇談会、学校での懇談会や授業参観、学童保育の行事運営などに父が参加していることで、子育てのネットワークや子どもを通じた友人の輪が広がり今では我が家の大切な財産になっています。



執筆者の横顔：

社会福祉法人身体障害者授産施設副所長
30代後半 20代後半
平成13年10月～11月、20年4月～5月(4ヵ月)



3-16 育休は、高校からの夢。夢の実現は、愛情の深化、仕事への自信に繋がり、働き方を見直す契機に

夢の実現

吉田 大樹 さん

育児休業を取りたいと初めて思ったのは、高校生のとき（平成6年）のこと。世界史を担当していた男性教師が「育休でしばらくいなくなる」と、堂々と宣言をしたことが今でも忘れられない。それから、「男性でもこんなに堂々と育休を取ってもいいんだ〜。じゃあ、いつか自分も育休を取ってみたい」と思うようになった。思えば小学2年生（昭和61年）のときに、男女雇用機会均等法が制定されたり、義務教育でも男女別々の授業が減ったりして、性別に関係なく、自分のやりたい仕事に就ける社会になってほしいという思いがあった。その思いが男性教師の育休と結実し、「子育ても夫婦が共同して取り組まなければいけないのだ」と思うようになった。「育休取得が夢」――。たとえどのような業種・規模の会社であろうと、この夢だけは実行させたかった。

現在勤めている会社の入社面接の際、すでに妻が妊娠5カ月であることを伝えた上で、「いまお腹にいる子が生まれたときは育休を

取ることはできないが、次に子どもが生まれたときには、是非育休を取ってみたい」と伝えた。こんな発言をしたら採用されないかとも思いながら、自分の思いは主張していきかけたのではっきりと言った。そして、この会社に入り3年が過ぎ、2人目の子の妊娠が分かった後、上司に「子どもが生まれたら育休を取ります」と肅々と伝えた。ただ、妻が専業主婦だったので、育休期間は1カ月半と短期間にした。従業員も少ない会社なので、これ以上期間を長くすると、今後の仕事にも影響があるとの思いもあった。当然、金銭的に持たないという面もあるが……。

妻には「絶対育休を取る」と結婚する以前から宣言していたので、妻も「しょうがないか」という気持ちでいたと思う。父親は仕事人間で、家事や育児にほとんど関与しなかったため、この反応はある意味当然だ。自分の母親については、「なぜ育休を取らないといけないの？」という感じだった。

育休中は、当時2歳10カ月の息子のお守りが中心。毎日のように公園や児童館に遊びに行き、さらに休日だと混雑してなかなか行けないようなところにも積極的に足を運んだ。特に、走り回っていることが好きな子なので、こちらも真剣になって一生懸命遊んだ。その影響で、自分の体重は徐々に減っていき、育休終了時には3kgほど減量していた。育児というのはそれだけ重労働な「仕事」ということが実感できた。また、子どもの漲る力を真正面から受け止め、その存在の大きさを感じることで、より一層子どもへの愛情を深めることができた。

育休の経験は、子どもの成長を肌で実感できる素晴らしい機会だった。しかし、「育休を取得する」という夢が実現した半面、たった1カ月半だけだったのでイベント的な催し

に終わってしまった感じもする。本当に重要なことは、「育休を取得すること」ではなく、「育休中に何をし、何を得られたか」ということなのだ。3人目が生まれた今も、妻は当然休むまもなく育児に明け暮れている。これが本当の育児だ。育休取得後、妻にもいつか好きな仕事をしてほしいとの思いがより強くなった。最近は自分の仕事が忙しく、平日に夕食を一緒に食べるのが減ってしまった。まだまだ反省すべき点は多い。やはり少しでも長く子どもの成長を間近で見たい。今いろいろな思いが頭の中で蠢いている。仕事をしないと生きていけないという決定的な事実も存在する。ただ、夢を実行に移したことは、仕事でも積極的に主張すれば実現できるという自信を与えてくれたのも確かだ。自分自身の働き方も積極的に変えていかなければならない。



執筆者の横顔：

出版業・記者 0～99人 30代前半
20代後半 本人・妻・子3人(男児2人(5歳、6ヵ月)、
女児1人(2歳)) 平成18年5月～6月(1ヵ月間)

